他に分類されない生産用機械・同部分品製造業

大企業に負けない技術力
～五輪選手が提案活動～
7-26　株式会社 ウエノテクニカ

桐生市の雄

群馬県桐生市にある株式会社ウエノテクニカは、1956年に有限会社上野鉄工所として設立。1962年に株式会社上野鉄工所と改組する。1989年、株式会社ヒロテック（本社：広島県）が資本参加し、1991年に株式会社ウエノテクニカに社名変更。現在は、株式会社ヒロテックの100%子会社として経営されている。

当社は溶接治具装置や省力化装置設計製作を行っており、自動車の車体部品溶接ではどんな部品にも対応できることが強み。国内外の大手自動車メーカーを顧客として、厳しいコスト・品質と納期に対応している。

ウエノテクニカの本社工場

親会社に追いつけ、追い越せ

ウエノテクニカが、技能検定に力を入れ始めたのは、親会社のヒロテックの影響が大きい。ヒロテックは、1966年の第5回大会から技能五輪に参加している。ヒロテックの創業者が職業訓練、技術者育成、技術力向上への熱心に取り組み、技術者養成の一環として技能検定を受検するとともに、技能五輪にも参加をしていた。

ウエノテクニカが技能検定を受検、技能五輪への参加をするようになったのは、ここ5年ほどの話。平成20年度後期技能検定は、社内で機械・プラント製図職種の試験が実施され、技術課長の吉原氏が検定補佐員として参加。これまでに機械加工2級で2名、鉄工2級で3名、テクニカルイラストレーション3級で4名、機械・プラント製図2級で7名が技能検定に合格している。

技能五輪全国大会では、平成19年度から3年連続で機械製図部門において敢闘賞を受賞している（平成19、20年度は亀山氏、平成21年度は横倉氏）。

確実に業務に直結する技能検定

技能五輪全国大会の常連となりつつある中で、相対的（社会的）に評価されることによって、顧客である自動車メーカーからも高い評価を受けている。自動車業界が技能検定に力を入れているため、顧客の品質保証の担保となっているのである。

また、若い担当者がトップメーカーと対等に話ができるようになり、大きな自信となっている。

「技能検定を受検する過程で、決められた時間内で、どの手法が最適なのかを考える癖がつき、発想力・判断力が鍛えられる。その能力は仕事にも必要で、大いに生かされている。」と総務部長の室氏はその効果を話す。

技能検定受検の勉強をすることで、品質や納期に対して意識が格段に向上し、自然と身に付く。これを若いうちからトレーニングすることによって、自然と生産性が上がっている。

社員育成計画の中心は技能検定

技能の伝承は、会社にとって重要課題。目先の仕事に追われてしまい業務の中で施策を打つのは難しい。「中小企業にとって、自社で教育体系を整備することや、資格制度を作るのは困難。体系的に学べる技能検定を活用して、有効に機能している。」と同氏は話す。経済状況が停滞しており、時間に余裕がある今こそ、社員教育の絶好のチャンスと考えているようだ。

「資格試験や大会は、仕事の中で培ってきた自分の能力が世間一般でどのように評価されるのかを、本人が自分を見つめ直すきっかけとなる。」とその効果を話す。

「社員の育成計画はまだまだこれから。一部では取り組んでいるが、全社的に広げられていない。今後は体系だった教育プログラムを確立したい。」と同氏。個人の不足している能力を把握する為、能力マトリックスを作成し、足りない部分をいつまでにどうやって伸ばしていくのかを一人一人の社員に対して計画を作る。その中心となるのはこれからも技能検定であることに違いない。

株式会社 ウエノテクニカ

- 業種：自動車用車体治具装置
- 住所：群馬県桐生市
- 代表者：北川 正文
- 設立：昭和31年
- 従業員：120名
- 技能士：16名

技能士へのインタビュー

吉原　　明氏（42 歳）職業訓練指導員
横倉　保志氏（22 歳）2 級機械・プラント製図技能士

やり始めると面白くなる

技術課に所属する横倉氏は、高校卒業後当社に入社。現在、入社 5 年目で、技術開発と 3 次元 CAD の責任者である。「技能検定の受検勉強は会社から言われて、ある意味では受け身ではじめた。だが、やっているうちに面白くなってきた。やればやるほど、奥が深い。」と同氏は苦笑いをする。現在では、技能検定に合格し、技能五輪にも出場し、敢闘賞を受賞している。

「一流企業の大きな会社と同じ土俵で勝負できるのは、非常に名誉なこと。積極的にチャレンジさせている。」と横倉氏の上司である技術課長の吉原氏は話す。

技能五輪全国大会で 3 年連続敢闘賞を受賞

敢闘賞を受賞したのは、技能五輪全国大会（平成 21 年度）の機械製図部門。「錚々（そうそう）たる企業の社員と肩を並べる中で、受賞ができて自信がついた。前々年、前年と 2 年連続で後輩の亀山さんが受賞していたので、負けられなかった。」と横倉氏。「全国大会で敢闘賞というのは、客観的に見れば、ものすごいもの。自らでその価値を高めて欲しいと彼らには常々言っている。普段の勤務態度などで、『やっぱりあいつは凄いな』というのか『あんなやつでも賞を取れるのか』というのか、周囲からの評価でその価値が決まるはず。」と吉原氏は話す。

今でこそ、全国大会の常連になりつつある同社だが、親会社に勧められ技能検定に取り組み始めた時は、非常に苦労していた。「当初はガッカリした。当社の当たり前が世間では通用しない。図面の記号などが全く違う。40 年前の鉄工所時代のまま、独自のものを使っていた。それでは、お客さんに対して失礼に当たるので、一から必死になって勉強をやり直した。」と吉原氏は振り返る。

ウエノテクニカ技能五輪チーム

吉原氏は、指導員ではあるが、技能士ではない。「逆にそれがいいと自分では思っている。どうやって指導するかを考えると毎日が勉強で、いい刺激、いい励みになっている。」と同氏は話す。

作業スピードが 4 倍に

「技能検定や技能五輪に参加することによって、若いうちからボトムアップを図ることができている。それが社内でいい流れになっている。」と吉原氏。

技能検定、技能五輪の勉強を通じて、図面を描くスピードと正確性が格段に向上した。「試験では、普段のスピードの 2 倍ぐらいで作業をしないと間に合わない。トレーニングを積むことにより、受検前なら 8 時間掛かっていたものが、2 時間ぐらいになり、スピードは 4 倍になった。」と横倉氏は笑う。

技能五輪で磨かれた腕で新たな提案

ものづくりの現場では、図面がなくなってきている。技能検定や技能五輪の機械製図とはギャップがある。現場では、3 次元が主流。「当社は、3 次元 CAD を使用した独自の手法で挑戦を続けており、そのトレーニングにより CAD 操作のスピードと正確性が格段に上がった。全国的にも珍しいと思う。」と吉原氏は胸を張る。

技能五輪で磨かれた腕によって、新たなことが提案できるようになった。3 次元 CAD でライン全体のシミュレーションができ、コンピュータ上で確認することによって、事前に不具合が分かる。顧客のコスト低減につながり、顧客へ生産ラインの提案をしている。

目標は、技能五輪全国大会で優勝

「まずは、技能検定で 1 級に合格して、技能五輪全国大会で優勝することが目標。優勝するためにはミスをなくすことが大事だと思うが、技術的には大きな差はないはず。何が足りないのか自分では今ひとつ分かっていない。」と横倉氏は今後の目標と課題を話す。「過去問で、トレーニングをしながら大会の準備をしているが、本番でもいつもと同じパフォーマンスを出せることが賞を取るためには重要。普段の仕事から 120 点を取るつもりで仕事に取り組まないと本番で 100 点は取れない。自分の知識に自信を持って、大会に臨める状態にしておくことが大事。大会では、冷静な判断力と応用力が重要。幾つかのやり方の中で、適切な手法を選べるのか。持っている知識を如何に応用できるか。短時間の中では、そこに差が出る。」と上司の吉原氏は冷静に分析し、アドバイスを送っている。今後の更なる活躍が楽しみである。